

## テモテへの手紙第二2章「反対者のいる中での働き」

### 1A 困難に耐える働き人 1-13

1B 次世代への継承 1-2

2B 三つの働き 3-7

3B イエス・キリストの働き 8-13

1C 福音のことば 8-10

2C キリストにある栄光 11-13

### 2A ことばについての論争 14-26

1B 信仰をくつがえす争い 14-18

2B 家にある尊い器 19-21

3B 良い働き 22-26

1C 情欲の回避 22

2C 主のしもべの教え導き 23-26

## 本文

テモテへの手紙第二 2 章を開いてください。パウロは、自分が牢屋にいて、かつ死刑を待っている時に、テモテに個人的に言いつけました。「1:13-14 あなたは、キリスト・イエスにある信仰と愛のうちに、私から聞いた健全なことばを手本にしてください。自分に委ねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって守りなさい。」苦しみの中にも、主に任されたことを行っていき、しっかりと任されたものを守りなさいと励ましています。2 章は、そのことをさらに掘り下げて語っています。

### 1A 困難に耐える働き人 1-13

1B 次世代への継承 1-2

<sup>1</sup>ですから、私の子よ、キリスト・イエスにある恵みによって強くなりなさい。

パウロは、テモテに、神の恵みがあることを教えています。牢屋にいるパウロから、アジア出身の働き人が離れて行きました。そのような、最も辛いことが起こったのに、エペソからオネシポロがやって来て、パウロを捜し出しました。ここに、神の恵みがあります。神が、パウロが何もしていないのにも関わらず、オネシポロの心を動かし、励ましを与えてくださいました。こうした、神の恵みによって人の心は強められます。

福音の中に生きる時には、試練や苦しみが伴います。福音の働きに関わったら、なおさらのことです。その時に、私たちはどのようにしたら強められるでしょうか？ 私たちが、アメリカから戻って福音の働きをした時は、このように人々が集まりませんでした。伝道を続けましたが、日曜日の

礼拝には人々はほとんど全く集まりませんでした。そうして打ちひしがれている時に、アメリカのカルバリーチャペルでは、毎年、宣教大会があります。世界中から宣教の働きをしている者たちが集まってきます。私は、よっぽど他の国の人々は成功しているんだらうな、と思っていました。そして、こうすればもっと効果的に宣教ができるのか、頑張りが足りないかと叱咤されると思っていました。

ところが、大会は、賛美から始まります。その賛美は、献げなさい、福音を宣べ伝えなさいと私たちの行いを促している歌詞ではなく、徹底的に、神が私たちのために、キリストにあってしてくださったことばかりでした。それで、だんだん元気が出てきました。そして、みことばからの勧めがありました。それはすべて、労苦している働き人を慰め、励ますものでした。世界から来ている宣教師たちは、多かれ少なかれ困難にあって、労苦していることを知りました。すべてが、キリスト・イエスにある恵みだったのです。それで、強められました。

聖書は、神がキリストにあって私たちのためにしてくださったことのほうが、私たちが神のためにしなければいけないこと以上に、はるかに多くを書いています。私たちが神に対してすることは、あくまでも神の恵みに対する応答であり、私たちの行いや努力によるものではありません。

<sup>2</sup> 多くの証人たちの前で私から聞いたことを、ほかの人にも教える力のある信頼できる人たちに委ねなさい。

神の恵みによって強められる中で、パウロはテモテに対して、働きを他の人々に任せるようにしなさいと指示しています。多くの証人たちの前で、パウロがテモテに話したのでしょうか。按手をした時の事でしょうか、聖霊の賜物がテモテに与えられました。そして、パウロに預言のことばが与えられたのでしょうか。伝道者として神のみことばを宣べ伝え、また教師として、教えることに専念しなさいというようなことを語ったのではないかと思います。そして、イエス・キリストについて教えを、テモテに伝えたのだと思います。

そのことを今度は、テモテの周囲にいる、信頼できる人々に委ねて行きなさいと言っています。しかも、その人々が他の人々に教える力のある人々です。ですから今、細かく言うと四世代が関わっています。パウロが一代、テモテが二代、そして教える人々が三代。そしてその教えを聞く人々が四世代です。

ある、中南米にある未開の地の宣教師だった人の話を聞いたことがあります。一つの部族の村の人たちが初めて、イエス様を信じました。そして、イエス様について、もっと聞きたいとお願いします。彼はなんと、断りました！そしてこう言ったのです。「分かりました、続けて聞きたいのであれば、まず、あなたのお隣の集落の部族の人たちに、あなたの知っているイエスについて伝えてください。それから、もっと教えましょう。」これは驚きでした。

私個人が、自分はイエス様について、聖書について、まだまだ分からないから、人々に伝えることはできないと思ってきました。けれども、そうではなく、自分が奉仕の働きに整えられていくということは、その先に、自分自身が他の人々を、その奉仕の働きのために教えて行くという使命を帯びているということです。

## 2B 三つの働き 3-7

<sup>3</sup>キリスト・イエスの立派な兵士として、私と苦しみをともにしてください。

パウロは、1章でテモテにこう言っていました。「1:8 ですからあなたは、私たちの主を証しすることや、私が主の囚人であることを恥じてはいけません。むしろ、神の力によって、福音のために私と苦しみをともにしてください。」苦しみを共にしてほしいとお願いしていますが、それを、「キリスト・イエスの立派な兵士として」と言っています。

私たち日本人は、平和教育を戦後受けて来たので、兵士の生活というのがよく分かりません。自衛隊の人たちしか、分かりませんね。けれども、はっきりしているのは、それは戦う人々なのだということではないでしょうか？テモテ第一の手紙で、「信仰の戦いを立派に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい。」という箇所を学びましたね(6:12)。戦後の教育のせい、日本の元々の気質なのか分かりませんが、戦うということを本能的に避けています。いざこざになることを避けます。しかし、そうすると、イエスご自身から、この方への信仰から離れて行くことになります。

イエス様は言われました、「マタ 10:34-36 わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と  
思っ  
てはいけません。わたしは、平和ではなく剣をもたらすために来ました。わたしは、人をその父に、娘をその母に、嫁をその姑に逆らわせるために来たのです。そのようにして家の者たちがその人の敵となるのです。」真の平和、イエス様にいたるために、それに反対する人々の心があり、そのための衝突が起こります。私は、イエス様を信じる若い時に、自分が信じたら親不孝になるのではないかと思いました。でも、こう考えたのです。「本当の親孝行は、親がイエス様を信じて、救われることだ。」そして、信仰をもって長いこと確執がありました。しかし、信じたのです。兵士として生き方が、福音に生きる人の姿です。

<sup>4</sup>兵役についている人はだれも、日常生活のことに煩わされることはありません。ただ、兵を募った人を喜ばせようとします。

兵役についている人の特徴です。日常生活のことで煩わされることはありません。徴兵されて、その徴兵した人を喜ばすことが目的になります。これは、本当に私たちには想像するのが難しい世界です。自分の好みの選択やプライバシーがすべて取られます。一度だけ、自衛隊の方々に触れたことがあります。東日本大震災の救援旅行で、現地の人々が避難している公民館で、炊き

出しとお風呂作りをしていました。でも、彼らはどこに生活しているの？と不思議でしたが、完全な自給自足です。テントを張り、救援物資から一切、どんな小さなものも頼ることなく、おそらくは缶詰のようなものを食べていたのでしょう。自分のことは一切、横に押しやられていたのです。

みなさんも、イエス様を主として生きて行く中で、自分を喜ばすための生活を、いろいろな意味で捨てたかと思います。もちろん、同じ仕事をしているかもしれないし、生活自体は大きく変わっていないかもしれませんが。けれども、その価値観を 360 度、変えました。イエス様が言われたとおりですね、「マル 8:34-35 だれでもわたしに従って来なければ、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者は、それを救うのです。」福音の中に生きること、また福音の働きをするということは、日常生活を大きく犠牲にすることであることを覚える必要があります。

<sup>5</sup>また、競技をする人も、規定にしたがって競技をしなければ栄冠を得ることはできません。

パウロは、福音の働き人となるために兵士の喩えを使いましたが、ここでまた別の喩えを使っています。競技者です。当時はオリンピックの競技など、運動については現代以上に身近でありました。当時は、最低十か月の訓練を受けるという誓いを立てるのだそうです。賞を得るために厳しい訓練を受けます。

しかし、ここでパウロが競技選手の喩えを使っているのは、「規定にしたがって」というところです。どんなに厳しい訓練を受けて、全力で競技に参加しても、規定に外れたことをすれば失格です。そこで、福音の働きにおいては、霊的な歩みで失格になるようなことをすれば、それで役に立たなくなってしまうことを話しています。健全な教えから外れたことを行った者たちについて、パウロは、第一と第二の手紙で話しています。第一の 1 章では、「健全な良心を捨てて、信仰の破船にいました。(19 節)」とあります。教会の働きにおいて、罪を犯してやめていった人々は、身近にいました。どんなに良い働きをしてきても、規定から外れたら台無しになってしまいます。

<sup>6</sup>労苦している農夫こそ、最初に収穫の分け前にあずかるべきです。

もう一つ、働きを喩えています。今度は、労苦する農夫です。農夫ほど、忍耐を要して、地道にやっていたいかなければいけない仕事はないでしょう。多くの時間と労力をかけても、天候の不順で不作であったり、害虫の被害を受けたりします。しかし、労苦した農夫が、初めの収穫にあずかった時に、その分け前にあずかります。

同じように、福音の働き手は、労苦がともないます。忍耐がともないます。数日前、私の知り合いの宣教師夫婦から、ニュースレターが届きました。日本での働きは、労苦も時間も二倍かかると書

いていました。ものすごい忍耐と従順が試される働きです。しかし、大事なのもそのように労苦した者こそが、分け前にあずかるということです。報われるということです。

<sup>7</sup> 私が言っていることをよく考えなさい。主はすべてのことについて、理解する力をあなたに与えてくださいます。

パウロは、敢えてはっきりと言い表さず、喩えだけ与えて、テモテに考えるように促しています。テモテが自分自身で、思い当たることを発見して、それが主からのものであることを確信させたかったのでしょう。

### 3B イエス・キリストの働き 8-13

そして、立派なキリストの兵士として働く時に、もっとも大事なものは、その将校であられるイエス・キリストご自身のことです。

### 1C 福音のことば 8-10

<sup>8</sup> イエス・キリストのことを心に留めていなさい。私が伝える福音によれば、この方は、ダビデの子孫として生まれ、死者の中からよみがえった方です。

福音の働きにおいて、最も大切なことは、イエス・キリストに心を留めることです。違った教えをする者たちが、エペソに多くいた中で、テモテに対して、最も中心にしなればいけないことが何かを教えています。イエス・キリストご自身です。当たり前のように見えて、実は少しずつそれて行き、別のことを教えているということがあるからです。パウロが伝えている福音と言っていますが、他の人々が伝えている福音と呼ばれていたものがあつたのです。それは、ユダヤ主義の影響を受けていた福音だったかもしれません。グノーシス主義の影響を受けていたものだったかもしれません。けれども、パウロの宣べ伝えていたのは、イエス・キリストご自身でした。

この方は、初めに、「ダビデの子孫」、次に、「死者の中からよみがえった方」です。これは、一つに人であり、かつ神であることを示しています。ダビデというユダヤ人の王の末裔として生まれた人です。けれども、死者の中からよみがえったことによって、神の御子として公に現れたということです。(ロマ 1:3-4 参照)そして、もう一つは、ダビデの子という呼び名は、メシアを示していました。聖書に約束されていた、ダビデの世継ぎの子が、永遠の神の国の王となります。イエスが、その約束のメシアなのだ、ということです。これは、次にパウロが述べる、キリストと共に私たちが王となるということに関わります。神は、キリストによってご自分の国を地上に建て直されます。その時に、ダビデの子として君臨されます。そのことが、聖書に、つまり旧約聖書に約束されています。

<sup>9</sup> この福音のために私は苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のことばは

つながれていません。

パウロが、イエス・キリストを宣べ伝えていたので、苦しみを受けています。犯罪者のようにつながれています。しかし、ここがすごいことですが、「神のことばはつながれていません。」と言っています。彼は、身体がこのように拘束されている時にも、みことばの宣教は必ずできると信じていたし、牢にいる彼から福音が伝わっていたのでしょう。

神は、ご自分のことばによって、ご自分の働きを行われます。パウロはエペソの長老たちに、こう話していました。「使 20:32 今私は、あなたがたを神とその恵みのみことばにゆだねます。みことばは、あなたがたを成長させ、聖なるものとされたすべての人々とともに、あなたがたに御国を受け継がせることができるのです。」そして、イザヤ書には、主ご自身が、ご自分のことばは、必ずその仕事をするを宣言されました。「55:11 そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、わたしのところに、空しく帰って来ることはない。それは、わたしが望むことを成し遂げ、わたしが言い送ったことを成功させる。」

<sup>10</sup> ですから私はすべてのことを、選ばれた人たちのために耐え忍びます。彼らもまた、キリスト・イエスにある救いを、永遠の栄光とともに受けるようになるためです。

ここの「選ばれた人たち」とは、神の救いに選ばれた人たち、ということです。パウロは、自分自身の口で、人々に福音を伝えることが出来なくなっています。おそらく、人づてで伝えていることでしょう。しかし、主が救うとお決めになっている人々は、彼の伝えて行く福音のことばによって、救われるという確信です。パウロがコリントで宣教している時に、激しい反対に遭いました。彼は恐れていました。けれども、夜に主が幻の中で現れて、こう言われました。「18:9-10 恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけません。わたしがあなたとともにいるので、あなたを襲って危害を加える者はいない。この町には、わたしの民がたくさんいるのだから。」これから救われる人々のことを、「わたしの民」と呼ばれているのです。

ですから、パウロは、まだ見もしない、これからも見ないであろう、それら救われる人々を選ばれた人たちと呼んでいます。そして、彼らが救いを受けて、「永遠の栄光とともに受けるようになる」と言っています。ここは、大事ですね。パウロはこれまで労苦して宣教の働きをしました。けれども、これら選ばれた人々も、同じように、共に永遠の栄光にあずかるのです。イエス様の、五時から雇われた日雇い労働者たちの喩えのことを思い出します。朝から雇われた人も、たった一時間しか働いていない人たちも、同じ賃金でした。神は、それだけ気前が良く、最後の最後の人にも、同じ永遠の栄光を与えたいのです。そのような方なのです。そして、私たちが神の恵みに触れると、最後の最後で救われた人が同じ分け前を受けても、妬むことなく、むしろ喜びを共にするはずで

## 2C キリストにある栄光 11-13

<sup>11</sup> 次のことばは真実です。「私たちが、キリストとともに死んだのなら、キリストとともに生きるようになる。<sup>12</sup> 耐え忍んでいるなら、キリストとともに王となる。キリストを否むなら、キリストもまた、私たちが否まれる。<sup>13</sup> 私たちが真実でなくても、キリストは常に真実である。ご自分を否むことができないからである。」

午前礼拝で話しましたように、キリストにある永遠の栄光にあずかる道をここでは教えています。キリストと共に死んでいく道です。そうすれば、キリストと共に生きます。死後にキリストに会います。そして、キリストにあってよみがえります。耐え忍んだ末には、ちょうどヨブのように、多くのものを神から受け継ぎます。神の国を受け継ぎます。キリストと共に王となります。

けれども、キリストを否むならば、神はそのまま捨ておられます。キリストに否まれます。そしてK自分が否んだとしても、キリストは真実な方ですから、ご自分のことを証しされるだけです。変わるのは、自分のこれからの行く先です。主は変わることはありません。

## 2A ことばについての論争 14-26

このようにして、苦しみの中にいるパウロが、確実にテモテに対して、神のことばをしっかりと、教えられる人々に委ねて行くことをしていきなさいと言っています。次も、しっかりと教えて行きなさいという教えが続きますが、ことばについての争いをしている者たちの間で、どのように教えて行けばよいのかを指示しています。テモテへの第一の手紙にあった、違った教えをする者たちがまだいます。もっと影響力を増していた様子が伺えます。

## 1B 信仰をくつがえす争い 14-18

<sup>14</sup> これらのことを人々に思い起こさせなさい。そして、何の益にもならず、聞いている人々を滅ぼすことになる、ことばについての論争などをしないように、神の御前で厳かに命じなさい。

「ことばについての論争」です。私たちの教会、また、カルバリーチャペルでは、このことはかなり警戒して取り扱っています。カルバリーチャペル・コスタメサの週報には、長年のこと、次の言葉を書き記していました。「私たちは教団ではありませんが、教団に反対しているのでもありません。教団が、キリストのからだに分裂をもたらしてきた教義的な違いをことさらに強調する点についてのみ、反対しています。」アウグスティヌスという古代のキリスト教指導者は、「本質においては一致を。本質ではないところでは自由を。すべてにおいて、愛を。」と言いました。互いに愛し合うことが、キリスト者がキリスト者と呼べる根拠であるとも、週報に書かれていました。ことばのニュアンスの違いで、延々と議論することによって、なんと不必要な教会の分裂をもたらしたことは、数知れません。

イエス・キリストについて、これは真理のことばとパウロが宣言していることについては、妥協の余地はありません。けれども、そうではない細部のことについて、そこは私たちの理解を超えたところの、隠されたところ、神秘的な部分であり、私たちは、ただ黙って、神の前にひれ伏すことしかできないのに、そこをあたかも分かったかのように議論します。神の御前で厳かにやめるように命じないといけません。そして、ことばの争いについて、「何の益にもならず、聞いている人々を滅ぼすことになる」と言っていますね。このような争い自体が良くないことですが、内密で語るのであればまだしも、人々が聞いている中で語ることは、本当に人々を滅ぼしてしまうこととなります。

<sup>15</sup> あなたは務めにふさわしいと認められる人として、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神に献げるように最善を尽くさない。

ここで、集中しなければいけないのは、ここです。真理のみことばをまっすぐに説き明かします。この言葉は、「真っ直ぐに切っていく」という意味合いがあります。つまり、みことばを、しっかりと人々の心に入るように、明らかにしていくということです。ネヘミヤの時代、レビ人たちが民に行ったことです。「8:8 彼らが神のみおしえの書を読み、その意味を明快に示したので、民は読まれたことを理解した。」

そして、このことが、教える務めにふさわしいと認められる者です。神に対して、恥じることのない働き人です。大事なのは、人に対して恥ずかしくないように最善を尽くすのではなく、神に対して自分自身を献げ、最善を尽くします。私は、アメリカで、スクール・オブ・ミニストリーという牧会学校に通いました。そこで、説教の仕方を教える授業がありました。そこで言われた一言が衝撃を受けました。「あなたが神のみことばを力強くするのはない。神のことばはすでに神の力であり、あなたの務めは、聖霊によってみことばを知ることである。」みことばが、みことばの仕事をしなす。私の務めは、いかにみことばが自分に明らかになるか、そして人々に明らかにするか、であります。

<sup>16</sup> 俗悪な無駄話を避けなさい。人々はそれによってますます不敬虔になり、<sup>17</sup> その人たちの話は悪性の腫れもののように広がります。彼らの中に、ヒメナイとピレトがいます。<sup>18</sup> 彼らは真理から外れてしまい、復活はすでに起こったと言って、ある人たちの信仰をくつがえしています。

「俗悪な無駄話」であります。ますます不敬虔にならせるようなものです。3章6-7節には、女たちをたぶらかして、情欲に引き回されていることが書かれています。教えを学んでも、性的な罪を犯しているような状態があったようです。人々の肉の力には、何ら力をもたないような話をしていたのでしょ。しかも、それが「悪性の腫れもの」のように広がっているようです。かなり根強い人気があったと考えられます。

そして、ヒメナイとピレトという名ざしがされています。ヒメナイについては、すでにテモテ第一 1



章で名指しされていました。信仰の破船に会っており、神を冒瀆していることを話しています。ここでは、真理から外れてしまったと言っています。

「復活はすでに起こった」ということですが、これはおそらく、二つの問題があったように思われます。それは、もうすでにキリスト者は完成されているということです。かの世がすでに来ていて、すでに終わりに到達している、完成していると考えていた可能性があります。異端で、「もうキリスト者は悔い改める必要はない」と教えているところがあります。キリストにあって救われたから、これから救われるための悔い改めをする必要はないのだということです。そのことによって、何が起こると思いますか？悔い改めないのです。自分の肉に対して、なんら責任を取らないことです。だから、人々を不敬虔にさせていると思われます。

もう一つは、すでに完成されていることを復活をからだの復活ではなく、霊の復活だと唱えていたかもしれません。そうでなければ、今のからだは明らかに、復活していないのに、それでも復活したと言い切れるのですから。実に戦前と戦時中、日本のキリスト教会の多くが、再臨は霊によるもので、心の中でイエスが主とされていれば、それが再臨だと教えていました。それは、キリストの再臨が、国体、天皇の国と衝突するとみなされたからです。主が、今の世を滅ぼして、かの世をもたらすことを信じなければ、今の世の中に溺れることとなります。ですから、神のこぼを信じない教会が、世の人と何ら変わりなく生きていて、敬虔の力を失っているのです。

## 2B 家にある尊い器 19-21

<sup>19</sup> しかし、神の堅固な土台は据えられていて、そこに次のような銘が刻まれています。「主はご自分に属する者を知っておられる。」また、「主の御名を呼ぶ者はみな、不義を離れよ。」

神の家を、第一の手紙でそうであったように、建物に例えています。その建物の、堅固な土台に、その建物の持ち主や建築に貢献した人の名が書き記されています。「主はご自分に属する者を知っておられる。」ということです。信仰の破船にあってはいる者たちがいろいろの中で、神の教会はそのことで倒れることはない、しっかりと立っていると、パウロはテモテに励ましています。とてもうれしいですね、教会にどんなに嵐がやって来るかわかりません。それが外からの攻撃もありますが、テモテが取り組んでいたように、内からの攻撃があります。しかし、それであっても、「主はご自分に属する者を知っておられる。」ということです。そして、その主に属する者たちは、不義から離れよと呼びかけています。

この箇所は、民数記 16 章のコラの反乱のところからのものです。荒野の旅において、レビ人コラが人々を扇動して、アロンとモーセに逆らわせようしました。それでモーセが、コラとその仲間にも告げます。「民 16:5 明日の朝、【主】は、だれがご自分に属する者か、だれが聖なる者かを示し、その人をご自分に近寄せられる。主は、ご自分が選ぶ者をご自分に近寄せられるのだ。」ここから

取っているのです。コラとその仲間は、生きたまま、その立っている地面が割れて、陰府に投げ落とされました。そして、火皿を持っている他の者たちは、そこからの火で焼き尽くされました。主に属していない者は、このように厳しく裁かれ、そして属している者は生き残ったのです。

それからモーセは、生き残っている会衆に警告します。「16:26 さあ、この悪い者どもの天幕から離れなさい。彼らのものには何もさわってはならない。彼らのすべての罪のゆえに、あなたがたが滅ぼし尽くされるといけないから。」主に属している者であれば、これらの悪い者から離れなさい、と呼びかけられていたのです。そこで次の、尊い器と卑しい器の話に入ります。

<sup>20</sup> 大きな家には、金や銀の器だけでなく、木や土の器もあります。ある物は尊いことに、ある物は卑しいことに用いられます。<sup>21</sup> ですから、だれでもこれらのことから離れて自分自身をきよめるなら、その人は尊いことに用いられる器となります。すなわち、聖なるものとされ、主人にとって役に立つもの、あらゆる良い働きに備えられたものとなるのです。

尊い器というのは、祝宴の時に出される、食事の時の器であります。木や土の器は、ごみ箱などに使われる卑しいものです。そしてユダヤ人は、汚れたとみなすものは、土の器は砕いて壊します。これが、神の家の中にどちらもあるということです。人々を不敬虔に陥れるような者たちは、卑しい器で、主によって砕かれます。しかし、尊い器は主人に尊く用いられます。

したがって、尊い器であり続けるために、聖さを保っている必要があります。ここにあるように、尊い器が、あらゆる良い働きに備えられていると言えるからです。

### 3B 良い働き 22-26

#### 1C 情欲の回避 22

尊い器として、聖さを保っているのに、性的なことも含まれます。

<sup>22</sup> あなたは若いときの情欲を避け、きよい心で主を呼び求める人たちとともに、義と信仰と愛と平和を追い求めなさい。

テモテが若い働き人でありますから、この悩みがあったのでしょう。もちろん、壮年になっても、おそらくは老人になっても、この問題は消えることはないでしょう。そこで二つの勧めをパウロはしています。一つは、情欲を避けることです。ヨセフのことを思い出します。彼がエジプトで、ポティファルに仕えていた時に、ポティファルの妻に、一緒に寝ておくれと言い寄られました。それを何度もされました。それで、彼は逃げたのです。上着をつかまれたのですが、それでも上着を脱ぎ棄てて、逃げたのです。避けることが第一です。

そして、次がもっと大事です。「きよい心で主を呼び求める人たちとともに」とありますね。義と信仰と愛と平和を追い求めるのは、敬虔に生きようとしている者たちには基本です。それをただ一人で行うのではなく、主を追い求める人々ともに行うのです。仲間が必要です。自分の肉に弱さや罪を告白できるような、信頼できる兄弟また姉妹が必要です。英語ではこれをアカウンタビリティと言います。自分のことを明かすことのできる仲です。そしてパウロは、「きよい心で」と言っていますね。悪い仲間、悪い友もいるからです。

### 2C 主のしもべの教え導き 23-26

<sup>23</sup> 愚かで無知な議論は、それが争いのもとであることを知っているのですから、避けなさい。

パウロが話している、卑しい器は、先ほどから話している愚かで無知な議論、争いのもとになるような議論も、卑しい器のすることです。避けるべきです。では、そういった反対論をけしかけてくる者たちに対しては、どうすればよいのか？それをパウロが、次に答えます。

<sup>24</sup> 主のしもべが争ってはいけません。むしろ、すべての人に優しくし、よく教え、よく忍耐し、<sup>25</sup> 反対する人たちを柔和に教え導きなさい。神は、彼らに悔い改めの心を与えて、真理を悟らせてくださるかもしれません。

主のしもべは、争わないということです。けれども、反対している者たちがいます。争いをけしかける者たちがいます。そうしたら、争わないでどう対応するのか？「柔和に教え導く」ということです。

常日頃は、すべての人に優しくします。その姿勢があって、初めて教える者はよく教えることができます。横柄にふるまったりしている者は、教えていたとしても、聞いている人の心を閉ざしていることになっています。そして、よく忍耐します。人がすぐに理解するとは限りません。時間がかかります。ですから、主の御霊が教えてくださるまで、付き合っていきます。忍耐するのです。その延長で、反対する者たちにも柔和に教え導くのです。厳しいふるまいで対処すれば、反対している者の心はますます遠ざかります。

そうではなく、柔和に教え導きます。そうすれば、自分ではなく、神ご自身が悔い改めの心を与えられるかもしれません。真理を悟らせてくださるかもしれません。神は、ご自身の慈しみで、人々を悔い改めに導かれます。その態度を見せて、それで聖霊の働きでその人が神に立ち返ることができるようにするのです。

<sup>26</sup> 悪魔に捕らえられて思いのままにされている人々でも、目を覚まして、その罠を逃れるかもしれません。

反対者自身が敵ではありません。敵である悪魔が、その人を自分の思いのままにしています。ですからこれは、霊の戦いです。霊の戦いにおいては、神の武器を身に着けないといけません。柔和がその武器の一つです。それによって、悪魔の欺きから目を覚まして、罠から逃げる人がいるかもしれません。

こうして、テモテに委ねられていることを、パウロは教えました。それは反対者が大勢いるなかで、それでも、召しにしたがって、賜物を用いて教え導きます。反対者の反対に引き込まれることなく、かつ彼らの中に悔い改める者が出てくることを願って、柔和に教え諭します。主のしもべは、労苦が付きませんが、キリストの立派な兵士として戦うのです。

キリストも、十字架の死に至るまで、神のしもべの姿を取られました。忍耐し、戦い、その中で、十字架に共に付けられている囚人が悔い改め、目の前で見ている百人隊長が神の子だと認めるなど、目覚める人々が起こされました。「ヘブル 12:2-3 信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをものともせず、十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。あなたがたは、罪人たちの、ご自分に対するこのような反抗を耐え忍ばれた方のことを考えなさい。あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないようにするためです。」